

蒙古源流卷之二

書籍部

東京

瓜生政和編集

太祖の傳

支那元朝の太祖ハ蒙古國のテラランエルダツクと云ふ地ニ
今より七百十六年前小生と幼稚名と鑛木真と云ひ
父の名と也速諛と呼ぶ也速諛ハ其國の一日の酋長なり
黒龍江及び支那の長城の辺に牧の羊と牧と業とあり
支那ある金の朝に從つて貢と致せり鑛木真幼稚なり
志ハ大い小父也速諛歿せし時歳僅に十三と云ふも屈せず

自身一々の酋長となり父が跡を継ぐ其旗下と支配せんとす然ととも鑛木真幼稚が故小衆人として小従ひす後遂に一揆を起し鑛木真が家と圍まんとする小因り鑛木真早く身と遁とカラコルムとらふ地へ往その國の酋長の許小竊ミ居り「カラコルムの酋長なる者鑛木真の材概九るらざる」とんて我が女と妻せ旗下の兵士数隊と預け号令官と倣し然る小鑛木真が英邁能その軍卒と懐けなむ「カラコルムの酋長女と妻せし小倣す忽地妬の心を生じ竊る小是と害せん」と計る鑛木真その密謀と知り早く遁とてまゝ古々のエルダツクの地小戻り不思

儀の計策を用ひ暫時の間小元の兵士と服従せしめ頼てその人数と將ひ「カラコルムの地小侵入り彼の酋長の軍とて一戦小伐破り勢ひ小乗じて近隣へ兵と向んと為しけり蒙古諸城の酋長ら鑛木真が兵力を盛大小至ると恐と各合併し之と伐亡さんと企て諸方の酋長ら同時小兵と進め来り既小黒龍江の畔り近くまで侵入せし鑛木真も我が旗下の兵と率ひ邀へ遮りて合併の大軍小當り十分一ある小勢と以て奮激突戦数時小あしび遂小彼の連合の衆軍と七列八裁小討破りけりその猛勢ある小恐戦慄只一戦小し諸城の酋長らこる降参り支那の



長城より外蒙古全國へ及ぶ
鑛木真小属一千里
万里の長城は秦の始皇の造
築せし所にして鞏固國より
攻入んとする敵を防くが爲
の設けあり東は遼東山海
関の海辺より始まり西は黄
河を越えて嘉裕関に至り
茫々たる砂漠の中へ止まる
長さ七百五十里にして其間

山と越え谷と亘り凸凹定り多
最高さ小至りく直立五十
丈の峯小達す城の高さ二丈五尺厚さ一丈五尺土手のこま
煉化石小く疊と上げ上り凸凹形の胸壁あり土手小く弓形の
穴の道を通り小さるる門と設く然り一町毎小堡
塞と備へ肝要の地小く土手と二重或は三重小築けり
堡塞の下小く関と居り成りの兵を置今日小至りくは処々
崩とつりとりども二千有餘年の遺物も依然と
く存せり是を以て宇内第一の大いなる物と爲りあり
爰小於く鑛木真小我が旗下の衆汗と黒龍江の支流も
る幹難河の畔小集會せりめ全世界と一統めん

盟約の日より、鉄木真と改め成吉思汗と名りし、今より六百六十年前の事とみぞ在りける。

蒙古國より大将の事と汗と云ふ成吉思汗と衆の大将の上の大将と云ふ訳とぞ。

然といふ今もて貢る一居たり一金の政府も叛き却てその地も攻入り遂に長城と伐破り続らく金の首都たる北京城と落陥と云ふ折より、韃靼王の領地も内乱を起し、聞き成吉思汗の金の政府との戦争の旗下の大将も任せ、かき自身大軍と引卒し、韃靼國の内地も伐入り、韃靼の兵も也尼塞河の源もあいて大激戦もあよび、十一分の

勝利を得し、破竹の勢も乘り進んで、カリスム國の境もひろし、カイホン河の畔も陳營も一は時、カリスム國の韃靼中の大國も天山の四圍より土爾其斯坦の全國もあよび、比耳西亞國の地も合せ領し、蒙古の兵の至ると聞き、大いふ國中の軍も募り之と遮ぎり討んとす、爰もあいて成吉思汗の我が長子も求赤と云ふ者も命も、騎兵七十万も將とて戦へ、令るも僅く一日の合戦も、彼の大軍と討破り、沙臘長城も布哈爾城もとり、落陥し、土爾其斯坦の地も攻取り、之も因りて、るも旗下の大軍も三隊も分け、大将と撰みて、附屬せしめ、隣方の

諸國へ討入らせ日暮らざりて比耳西亞とも平定し遂に魯
 西亞國の内地まで侵撃すとも是れ對して當る敵なり
 然るに寒さの空に向ひ山々を雪と催せず小懼れ成吉思
 汗の兵と旋らりて本國蒙古へ歸り「カラコルム」の地は都
 城と築けりびとき支那の地方へ蒙古の諸將勝れ乘
 り頻り内地へ攻入りて全く金と討亡せしめ成吉思汗の
 齡殆ど七十に近けりとも全世界を併吞せんと欲す
 の念も強く壯なるも猶も支那の宋朝と伐平げんと
 自身大軍と將ひ沙漠を越りて支那の西北の地方より攻
 入りて半途に病疴に罹り六盤山の麓に歿せ

り成吉思汗「エルダツク」の地へ兵を起しよりて死す
 る迄數十回の戦ひを人と殺すと五百万餘まで成吉思汗の
 妻ありて妻とありて五百餘人へ至り子と産せしむ甚る
 多く其子なる廣大の領地を保ち成吉思汗歿すの後三
 男窩闊台とクビ者位へ即き是と太宗と号す太祖より
 第四世忽必烈へ至りて遂に宋朝を亡し支那全國を従
 之國と元と改め名を世祖と呼ぶ蒙古の大汗の位を兼
 けり其所領南に支那前印度より北に西比利亞と越
 え氷海へ達し東に朝鮮満洲より西の方小亞細亞へ至り
 亞細亞の大畧を併吞せり斯の如き廣大の領分

保ちし者ハ世畧閑闌とあり未だ有ざるころとぞ

元の世祖大い海軍と起し我が日本を攻んとし文永五年

八月書と日本に献ず時人皇九十九代 龜山院の御

宇ふしく鎌倉將軍ハ惟康親王執權ハ北條四代相摸

守時宗あり時宗等元の世祖の書中ふ無礼の文

言ありと怒り元の使者趙良弼と云ふ者と筑紫より

追ひ歸す爰ふ於く趙良弼戻りふ望み筑紫の浦人

塔次郎弥次郎と云ふ者と捕えくその國に歸りけ

ると元の世祖二人ふ日本の事と向ひ正し金銀と与え

りて送り戻せり同十年五月元の使者趙良弼二度



元の大軍 海軍へ 攻来

日本の事と探らんといて筑

紫ふ来りける故時宗九

の武士ふ令りて太宰府より

直歩ふ之と追ひ返せり同十

一年十月元王我が朝を伐

んとし忻都と云ふ者と

大將とあり二万五千餘人

の兵と渡り對馬の國へ襲ひ

来る九筋の諸侯兵と進ぬ

て是と戦ひ元人利あらず

軍破して國不歸る

後宇多院弘安二年九月元の使者杜世忠と云ふ者
長刀室の津の浦ふ来り直ち不関東へ立越えり
北條時宗諸將と評議し遂不杜世忠と捕え
龍の口ふ斬りその首と梟す同三年十月元の世祖
日本ふと杜世忠と戮せしと怒り阿刺罕范文虎洪
茶立の三人と將とて十万余兵の軍と起し日本と
撃んとめると以て高麗王晴もまた元の軍不属し
國中の兵と拳て世祖と援るのより聞えけり時宗大
いふ驚き筑紫の諸將菊池松浦原田とらふ令て

防戦の備と為さめ関東の大名と上し禁廷と守護る朝廷
ふの勅使と伊勢かよひ諸社不遣りし賊徒平伏と祈ら
せぬふ是ふ由りて天下悉く物急し同四年八月元の大將
阿刺罕范文虎かよひ忻都洪茶立の四持兵士十万人と
將ひ船六千艘ふ乗りて元の地と奪す時不阿刺罕路
ふし病疴ふ保りて死す故ふ元王命とて左丞相阿
塔海とらふ者と以て之ふ代ふる不阿塔海未と到らざる
前ふ范文虎洪茶立ら海と航し肥前の国平壺の島
不着し五龍山ふ依る九笏の兵防禦血戦す時不暴
風俄し不起り怒浪大山の如くさる賊船大い不破損す

范文虎洪茶丘忻都の三將ハ早く損ぜざる船小乗
 く遁と去り士卒十方ハ尽く島小残さる然る小兵糧
 の船風波のぬ小沈没し何とも飲食せざる三
 日彼の破とくる船小集りて五龍山の下小漂ひ居る
 と菊池松浦の諸將その弊と覘つて是と襲ひけり
 賊兵拒ぎとふと能りて悉く討殺さる生捕りと
 するりの三万餘人八角島小於く首と斬りその内
 干箇莫青呉方の三人と赦しけり事と元王小語れと
 本國へ歸しけり北條時宗ハ宇都宮貞綱と
 將とて中國の兵と筑紫小赴むりめ其軍すべ

小備後小至る小元の兵を破とつと聞けり然れども
 貞綱兵と班さず進んで九羽小至り異賊を襲ひ来
 らん時の備へと設く同八年元の世祖日本と攻んとし
 却つて日本のぬ小我が大軍と悉く襲ひ殺さる
 と怒り高麗王を以て阿答海ら小命ドク軍船と造ると
 五百餘艘人民ことかぬ小大い小苦むむ時江南の地
 盜賊頻り小起りける是ハ水手と募る小より船
 と造る小役せらとく民の生活届らざる小因ると云ふ
 と以て群臣ことと諫むととも元王用ひず既小し船
 成就しけり阿答海ら再度軍と奔りて日本へ兵と

渡さんとす時小元の臣吏部尚書劉宣と云ふ者上
書して深く之と諫む元王その言を納むと漸やく
東征を罷るとるん

○佛蘭克林の傳

佛蘭克林は北亞米理加島合衆國の中ペンシルバニアの地の
費拉特費府の町に産せし人なり其祖先は英吉利よ
りけ地に移住せし者あり佛蘭克林幼雅して天然の才
あり同國に名高き上帝の道學士格董馬沙と云ふ者
の録せし書と讀み是を模範と爲し身と修むると小明らか
るのこみならず諸術に長し殊に究理の學に小あかり

Handwritten notes in cursive script at the top of the page.

古今未曾有の發明多し抑合衆國の時に英吉利の領地
とあり居るは萬事英吉利に支配せし其頃の英
吉利政府支那より仕入る茶を亞米理加島に持渡
り合衆國人を以て買請ることを然る小けり小
至る買ふ者よりも茶の高小應下る運上と出すべきと
しと觸渡りけるや亞米理加人は是を議論し賣者
より運上と上るは天下一般の通理なるとも買者より
運上と取立るはもつとも非道なり何故に斯英吉利王
の政事暴虐貪婪あるぞと頻り小是を惡く居る折
から猶種々の難言と言ひはけり合衆十三州の

村長ら費拉特費府ふ打集り千七百七十六年今
 り百五年前六月九日遂ふ英吉利政府ふ反けり因り
 彼の國人ら攻来らば引請て戦争るさんと衆議決定
 るけりば華盛頓と云ふ人と押て武官の統領こ
 フダムスと云ふ人まゝに蒙克林とて擧て文官の長
 とるしつり爰ふ於て合衆十三品へ檄文と廻すふ英吉
 利王の暴虐るる罪と華へ十二箇條の戦ふべき訳あると
 と記しつり是則に蒙克林らガ筆と下せしとるふ
 しく世衆の人たる明文と以て称す然まども何まの
 書ふも掲げ出しつて珍らしからねば爰ふに贅せず既

ふは前の年の四月十九日英吉利亞米理加の西軍ロキシ
 トンと云ふ地ふ於て戦争の手初め有りしが終ふとの會
 盟ふて檄文と廻すことあり夫よりフンケル山波士頓府
 の戦争るどと初めつて或ひに勝或ひに負雌雄決しつて
 とりども亞米理加勢の軍用の金穀或ひに機械とるふ事
 と缺るる農兵の集りしもの英軍に全備るしつる熟練の
 兵卒もえ稍もるしに亞米理加勢負色ふあるふぞに蒙
 克林から休むて味方の勝利思束るしと思ひける故
 一人に蒙西へ渡り彼の政府と説諭し遂ふ合衆國と
 しく獨立の政府とるしに蒙西と條約と取り結び



〇 仏蘭克林
 用て
 雷根元
 〇 仏蘭西帝かよび其諸將
 と説き械械彈藥軍用金と
 うと借り且大いふ海軍と起
 うめて合衆國の應援と出
 させけいば流石傲慢の英吉
 利勢も合衆國と戦ひ勝利
 あり難きと察し終ふその
 人民の望みの如く合衆國と
 して獨立不羈と做し威勢
 歐羅巴の各國も譲らず既

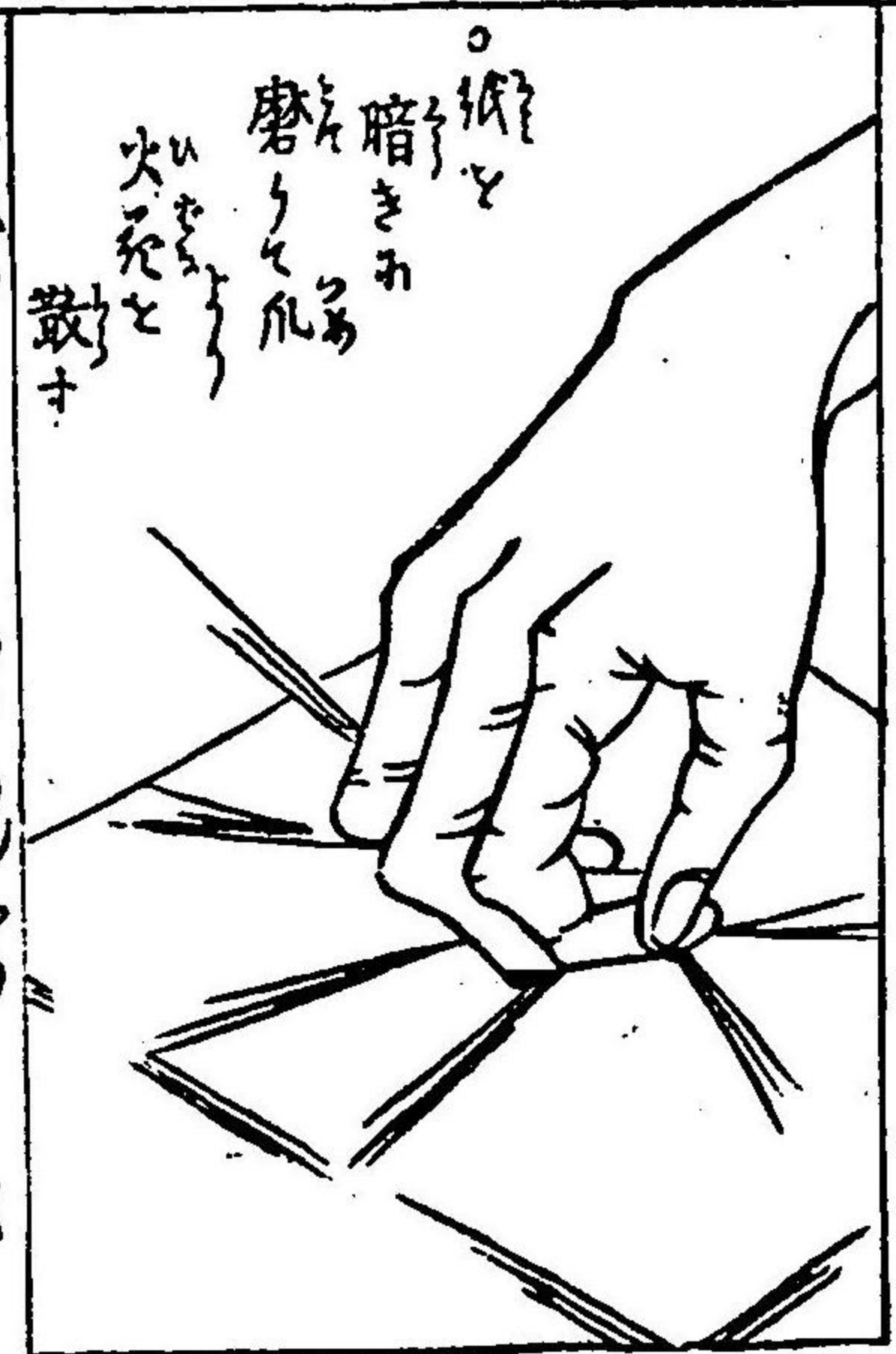
ふ今日の盛んあるに至るは仏蘭克林の功績もつとも多
 然し一に仏蘭克林常自ら功績と成しつる事と言
 ひて我の只行ひの信實あるを以て國人も重ぜらるる事
 我の才能あり且智辨あり故に一言と言ひ出んとする
 ふも先づ盪えらるる依りて無益の間と費やせり然れども
 我が願ふところの物いり行いし事と得らるると言ひ
 とるん仏蘭克林曾て越歴篤兒の理と推し究め雷電
 光の根元と發明せし事
 越歴篤兒とい希臘國の詞ふして日本語ふる不すと
 する黄色琥珀とりふてふて始りて黄色なる琥珀より

る力と見出しるふ因りる力と越力篤兒と名づけりあり支那人は是と訳して電氣とらふ越力篤兒天地の間の万物は備する氣ふて多いう少いうけ氣と持ざるはる一琥珀と硝子の氣と分て多く人の体中ふも多しその証扱ふは白き紙と三四枚重ね火ふて温め板の面う或ひは畳の上とくかき力と入と凡の平ふて急ふ七八度強く摩るとは黒暗の所ふく凡より火花と散する然してその摩りくる紙と燈心或ひは荳菰などの軽きもの小寄と紙ふ吸とて上るべし凡より出る火花は越力篤

兒の傘せしふて軽き物の着く上るは越力篤兒の力の働きあり又黒暗く猫の毛と逆さふ摩るとは火花の散るも矢張越力篤兒の傘せしふて越力篤兒ふも種々有とども是と撮んで解は陽越力篤兒ふ陰越力篤兒とす硝子の越力篤兒の陽ふく琥珀の越力篤兒の陰ありまて陰陽等分の力の越力篤兒ありて是と中越力篤兒とらふ陰と陽との越力篤兒出合は相互ひふ引力ありまども陰と陰は背き離れ陽と陽は背き離る是と追力とらふ引力の引あふ力追力の離れあふ力世ふ引力追力と云ふは則ち然るふは陰陽と兼し

中越力篤見の陰不逢くも陽不逢くも引力あるなり
 是と試すふの燈心と五六分の長さふ切り細き糸ふ
 く釣り下げ琥珀と畳の面ふ摺りつけ陰の越力篤見
 せ起し是と燈心ふ近寄せまの燈心とちまち吸付
 り然して琥珀の越力篤見燈心ふ漆移まの放ま
 く元の所へ返り再度陰の越力篤見と起せしものあり
 吸付ず是の燈心ふ琥珀の越力篤見漆移りて
 燈心もまの陰の越力篤見の質とる故陰の越力篤
 見の気の請ざるありけし時硝子と畳ふ摺りつけ陽の
 越力篤見と起し燈心ふ近寄せまの燈心とちまち

是ふ吸付あり然して硝子の越力篤見燈心ふ漆移
 ると放まて元の所へ返り再度陽の越力篤見と起
 せしものふの吸付ず是の燈心
 硝子の越力篤見漆移りて陽の
 質とるて初めの如しけ時
 まの琥珀と摺りて陰の越
 力篤見と起し近寄せまの



磨くて凡
 暗き
 火死す
 散す

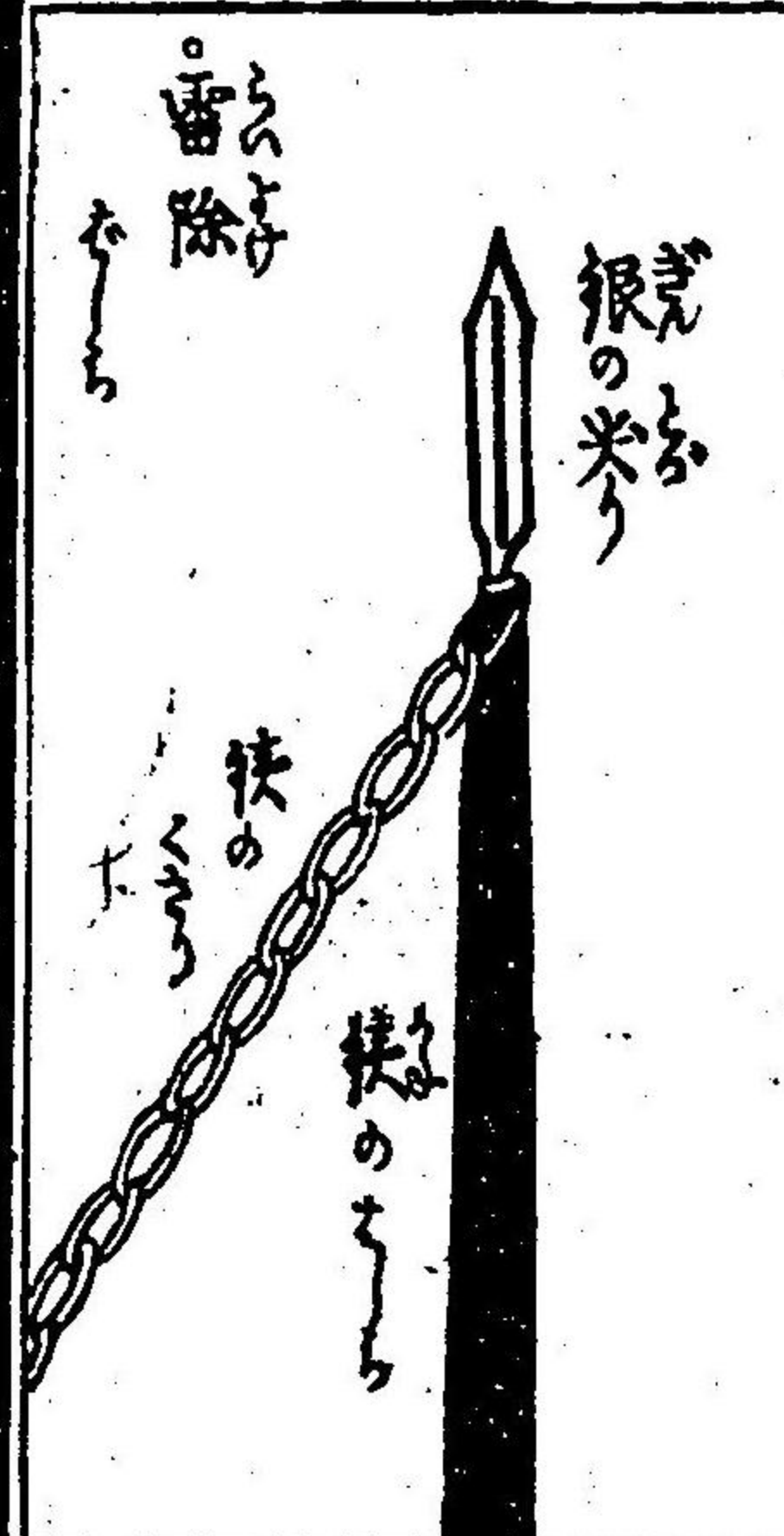
吸付あり斯陰陽と替りてふるは何度でも吸
 付て初めの如し然とて雲の中へ越力篤見あつて
 陰と陽との越力篤見あらば相互ひふ引よを陽と

陽陰と陰るまじ相互ひ離れんと引も離るも其
 迅速あると手の脈一ツ打うらふ百八十七間を往来す
 然るふ空気の水の如き質ふてなきところ出来まじ
 在るところより埋合するのみまじ越歴篤見の往
 来しる跡の絶間と塞ぐんとして急ふ其ところへ押
 込むゆえ空気と越歴篤見と摺あひ裏きの声と発
 す是と雷と言ひ又火花と散すと電光とらふ越
 歴篤見の火打鎌空気火打石ふて鎌と石とすま
 めふく声と発し火花と散すと其理同く空の蓄水
 器と水の中へ押入まるとブクくと云ふ音のなる水

と空気と摺あふ声黒暗ふて天窓を打や眼くら電光の
 出るも越歴篤見の発せしあり然まじ仏栄克林雷電
 光の雲の中ふ起る越歴篤見を思ひける故十七
 百五十二年今より百二十一年前夏の日驟雨と催す
 雲の中へ越歴篤見を吸ふ銀ふて拵へて鎗の穂の如き
 尖りと尻ふ結つけ尻と揚く揚く糸の止りと地へ打
 込し杭へ繋ぎ夫の谷子と窺ひ居ると尻ふ付くる銀の尖
 りの雲中の越歴篤見を吸ひよせ是と糸ふ傳えと地
 下ふ降り来ふふぞ糸の震へて生れまじ少く声と
 出すと聞くら爰ふわらへ仏栄克林の種々ふりて

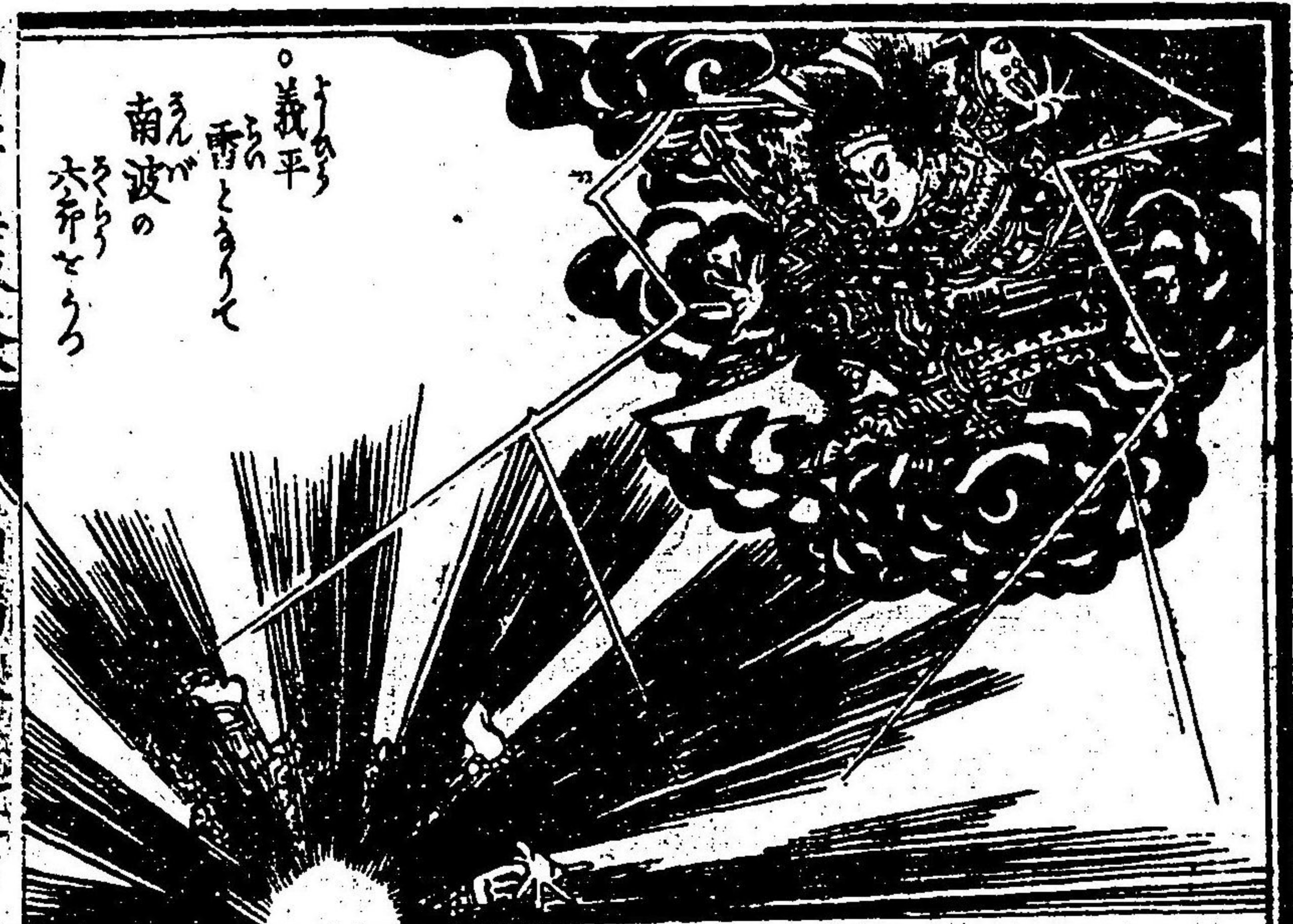
西遊記 卷之三十一 十三

試し見るふ越歴篤見と奔す道具ふて拵へしもの
 愛りなる故ふ其理と推し遂ふ雷除柱の發明と得
 あり抑避雷柱を雷を除るふあらず雲の中ふ
 奔りたる越歴篤見と柱の上の尖りふ吸寄せ水の中
 或ひ地の下一散一真きと奔し光りと放しめどとの
 仕掛あり避雷柱の説餘の書ふ多く著しこまの爰ふ
 畧す仏蒙克林が雷の越歴
 篤見とらふとと見出さるる
 い其説が二様ならんことども
 多し陰陽の激するところと



ぬ陽の気陰ふ通る般々の声と奔すと言ふゆえふ
 是と論せしゆりちふ試し小雷と拵へんと思ふ底深
 き桶のうちぬ紙と燃し其紙すくふ燃尽さんと為
 ると桶と打伏せしりて盥の水の中へ押入ると火
 の陽気水の陰気ふ迫り般々の声と奔し且陰の気
 陽のぬふ吸し水の中へ逆流盥の中の水の容
 量するありけ時桶と持上ると桶の中より水の落る
 と雨の如しと之すをもち紙と燃したる中より出
 越歴篤見と水と摺合ふ音す桶の中へ水の昇る
 空気のカホリ陰陽の訳とする未と其理ふ暗きの

あり又本朝の人雷と成りて仇と復せし話一往々
 あり源の義朝の嫡男源太義平平治の戦ひ小敷
 一父義朝と共ふ都と道と尾張の國の内海に至り
 義朝へ関東へ往き義平は北國ふらぐ兵を集んと
 約し義平をやく飛弾小至り私う小兵と催す小近隣
 の武士多く義平小属しけしむ義平大い小喜び再度
 軍と帥ひく京師小攻登らんとなすけ時義朝内海小
 在りく長田忠致の爲小弑せらるると言ふと聞へ
 けしむ同意るしる諸將る其約小背さるり義平
 之の成らざるを憤りて以爲我が黨の命運と小尽



義平
 南波の
 六舟とらる

くり連も死んぬ清盛と討
 て父の寇と報せんふい如ずと
 覚悟し姿と愛へ身と懼し
 て洛小至り清盛と狙ふとき
 小平氏の者ごとと知り其
 兵三百騎義平が伏せ居る
 る所の家と圍む義平力戦
 して数十人と斬倒し遂小
 圍を破り石山の紐小道と
 往しが運尽既ふして收擒小

西行集 卷之二 十五

就く清盛南波次郎とて之と斬らむ義平死ふ
望み慨然とて云ふ悔らむ信頼ふ防げらむ我ら
計と施さるる事と

清盛熊野ふ詣ぐ京ふ還るの時義平路ふ待て
之と撃んと為せらむとも信頼聞ずく其計策行

今義平之と悔てる語あり

南波咄ツて後悔益る一と言ふ義平之と聞勃然と

一と嘆て云ふ我異日雷と成つて汝ふ崇りせん

南波らむと咄ひ遂ふ義平と斬らむ其後仁安三

年清盛攝刃布引の瀧と抱覽一南波とてふ従ひ

くろくか 霹靂南波の頭上ふ降り南波震ひ死

くろくと云ひまゝ新田義興菅相系とらむまけ説あ

り然ととも雷の雲中ふ奔る越歴篤見る故以時

り避雷柱あらむ義平義興が靈もまゝ銀の尖り

ふ吸ひ取らまらん

仏蒙克林避雷柱と弁明せらむ雷多き國ふても堂

塔と損せず火薬庫を焼ず殊ふ亞米理加刃墨西哥

の海灣ふて年々雷のふ破損する船数十艘ふおよび

くろくが船中ふ避雷柱と建しより以来との憂へ絶へ

くろくと言ひ然とて仏蒙克林が凧と揚げ雷電光の根

元を見極めし倣ひ後の究理学者をその上を試んと
 して雷雲の中へ風を放ち風を揚ぐる糸を握り居る故
 糸より我が身体へ雲中の越歴雫見を傳え糸を握り
 手と放さんとすとも放まざる遂ふその終死し居る
 者も有りしと云ふ
 又風の空気の流動より空気日の熱ふ蒸を立昇り其
 昇り居る跡へ他の空気流とて来ると譬へが長き溝
 堀の左の一方の水を掻出せばその貯る跡を塞ぐんとし
 て右の一方の水来るふ因り流動を生ずると同し理ふ
 しく空気の流動するを風と云ふなり静るる空気も

團扇を以て扇げば動いて風を生ずる如し風を空気の流
 動と見極めし由は葉克林なりと云りけ人年五十ふ
 しく始めて物質学の修行を始り終ふ奥儀を極めと
 り故ふ常ふ人ふ論して仮令晩学なりとも勉強ふ因り
 成就せざるをいふものと言ふと云ふ
 まく因ふ依りて言ふ歐羅巴島以太利国ふ「嘎喇婆
 尼と呼ぶ者あり醫術ふ長しかひて物の解剖を為
 るの妙を得たり故ふ人の病疾を愈し或ひは他ふ雇
 せ獸類虫類などの解剖を為ると以て活業と為す
 嘎喇婆尼一時大いなる蝦蟇を捕え来り是を解剖

さして後剥くる皮を乾くと傍らふ在あせり鉄の
串と銅の串とふく手足と腰のところが突張り
かひ置くるふけ蠶忽然とて蘇生手足を動
稍飛出んと為るの勢ひあり噉喇婆尼見て驚き
是の可怪ると眼を極め息を鎮めて容子を窺ふ
ふ全生くる物ふも有らねば弥呀うり恐み蠶を
捕えん張あきくる金串とひき外せ只の剥くる皮
とありつり故ふまゝ金串と掛る暫時と動き
出すと故の如く爰ふ於て噉喇婆尼の持る刀
と投出腕を組と頭を垂と忙然とて盪えり



○噉喇婆尼
かりと

解剖

えんご
とらふ

稍有りて膝と打是ぞこれ蠶
の質銅と鉄との二種の気ふ
感動き出せりあらん
と思ひけとバ猶種々ふ経
験し遂ふ蠶の質銅と鉄
との二種の気ふ感動越歴
篤見と起せりあると奈
明せり故不斯の如き物よ
り奈する越歴篤見と噉喇
婆尼須無ともりふ近來金

の滅金小噺喇婆尼滅金と称するの専ら世上せうじやうに行おこなゆる是これもまづけ噺喇婆尼わらわにの発明はつめいせし如ごとく

○鯨黒太子義都華の傳

鯨黒太子義都華くわんくわくたいぎとくわは千三百三十年今より五百四十三年前まへの七月その首府倫敦ロンドンに生うまはるる父ちちは英吉利王第三世いんぎりやうだいさんせい義都華ぎとくわふく母ははの名なを「ロリツパ」と云ふ鯨黒太子十三くわんくわくたいしじゅうさんふく兵馬へいばと操あやつるの学まなびふ入り十五の時ときに英吉利西国いんぎりにしこくと一いつ大事だいじ件けん起おこりし

け時ときに英吉利西国王いんぎりにしこくやう四世よんせい查爾禄チャールズ歿がたし近親きんの血統けつとう絶たつるふより瓦羅義斯ワラキス候こう六世むくせい非立ひたつたり人ひとその従弟じゆていを

るを以もつて王位やうゐに登のぼりし然しかるに英國王いんこくやう三世さんせい義徳ぎとく瓦わのいん蘭らん西せい前ぜん王やうの甥せうある故ゆゑ當時たうじのいん蘭らん西せい王やう非立ひたつより血統けつとう絶たつと以もつていん蘭らん西せいの王位やうゐと併あせ有あるとし屢しばしば是これを論ろんじけどもいん蘭らん西せい人ひと拒こむ其望そのぞを應おこぜざりし

然しかるに英國王いんこくやう三世さんせい義都華ぎとくわの鯨黒太子くわんくわくたいしと共ともに軍艦ぐんかん數十いくばく艘さうありち乗のり千三百四十八年今より五百二十五年前まへの七月しちがつにいん蘭らん西せい國こくに押渡おしわたり諾爾滿ノールマンの地ちに攻上せうあすとどけ所ところの者ものら豫よて英吉利いんぎりに内應ないおうする居ゐたりけむ加雷城カライヤウの如ごとく忽たちまちに義都華ぎとくわの手てを落おちける然しかるに

け勢ひ小乗ド佛亜府の城と攻取るとして走向ひ小佛
 亜府の人民若干の金と出小兵馬の難をらんとして望
 けとい英王是と請諾る小金請取るとして僅の兵と止
 総軍のる小前路小進を佛亜府と遠ざかりけとい
 城中の人民約と愛小金と出さる而己ならず残
 留り英の兵士と不意小襲つて討殺せば英軍散々
 小逃まとい辛しく命と助り者本陣小追つて斯
 と注進る小英王大い小怒り直小兵と引返
 佛亜府と攻伐ち其町家と焼拂ひ高樓大厦も時の
 間小只一抹の煙りと為り小蘭西王非立は是と聞

き急き兵馬を整へ既小間近く軍と進め来り
 爰小於く英王義都華いけ度の戦争小黧黒太子
 と総大将と為り初陣の功名と顕させ衆兵と是小
 服させんと思ひけとい老練高名の勇將と太子の傍ら
 小置戦場小進まり自らの本陣小残り一室小籠り
 く戦争勝利太子の無事と祈らまはる時小太子
 年十六の度の戦ひの総大将と命ぜらる如何小も
 しく抜群の功と著る父王が悦び小備へんと思
 たるけ斯く明とい東雲の靄を晴ぬその中
 陣鼓の音き夥しく小蘭西王非立自ら大軍と率

西哲叢書 初編卷之三

二十

ひたすや押出し来りけりど、鷲黒太子も兵と進め既ふ
 両陣間近ふ成りけりけし時、仏軍の先鋒ハ伊太里勢
 ふく能弓射の者のこゝろ故、只一拳の下ふ英の軍と射
 て倒さんと勇進、英軍もさへ手強き働き、大
 子ガ初陣の功ふ備へんと思ひけり、我先ふと身と進
 め敵味方の間ひ僅七八間ふ成りけり、頃時、うと双
 方う小箭つぐ射出さんと、ゆるゆるふ仏軍今朝出陣
 のと、遠う小驟雨ふ逢ひけし時、ふ至り伊太里勢の弓
 弦湿り思ふゆるふ、さへと能はず英軍の箭継、やふ
 射出し、る故とと防ぐふ手段、先づ戦ハず、て

敗走す佛の大將アレンツン侯ハ先陣の敗走ふ構えず
 竊うふ間道と経く、鷲黒太子の旗本勢ハ攻か、さう然
 とど太子の左右ふ、老練智勇の大將ら擁護せり、の
 ろらず太子天然の武畧あ、さへ急ふ備へと立直、是
 と迎へて血戦、勝負り、さへ中なるふ仏軍の方より
 日耳曼國の騎兵隊アレンツン侯と援け、討か、さへ英
 軍の方より、ハアルユンデルと云ふ大將、ハイサレフトンと云ふ
 大將と共ふ一軍と引、援ひ来り戦争益さ、んふ成り
 たり、実ふ今日の勝敗ハ一戦ふ有りと見え、けり、使
 番の騎兵あ、さへ英王の陣營へ馳来り太子の御本陣

百五十五

十一

戦争最中より仏軍の金銀よく雇ひ揚ぐる兵士と云ひ
 といふ人数多し急ぎ総軍を將ひて御出陣あるべしと云ひ
 けしき英王聞く今日の太子ふ命に名譽と顯せしと云ひ
 つけ置たり且太子の四圍の老練武勇の人々あり吾往す
 も勝敗の彼らの上ふ有んと言傳えよとく猶一室の内ふ
 入り神と祈ると元の如くかろけしき太子と始め旗下の
 諸將も死力を尽し働さるる故仏軍の旗色漸々悪し
 く一段下り二段下り捲り立ちと見えけしき仏蘭西
 方白耳義國の大將「チャルレス」の耐え得ず馬を返し
 敗走す「チャルレス」の父「ホヘミヤ」と云ふ老將の齡傾き眼

さ眇みて見えざる程も其往昔戦功多く勇気な
 盛んむむげ戦場へも出陣し遙く引下り居たり
 味方の陣列かしく破ると聞き吾年老戦場ふ出く味方
 の敗軍と共遁歸らば我許もなき餘命と惜みて何
 のぬふ軍ふ出しやらんと突ひの種と醸すも耻し
 快く討死せんと思ふ我として戦場へ連れ往くべしと在
 りけしき附従ふ臣下らも實ふ僅なる餘命と保ち病疴
 ふ罹りて死んより今日の討死こそ勇まかるべしと思
 ひけしき一同と擁護して勝誇つる英軍へ會訳も
 く突入り必死の勢かひ猛るむ英吉利勢かひ捲ら



討る者数と知らず然と
も衆寡敵すべし有らざ
一人討と二人伐と終ふ
悉く討死をせし実勇
き有さまり再説佛蘭西
勢の其処小破らと彼処小散
今ハ仏王の本陣のこ成
りごとと仏王更ハ勇氣撓
まず猶戦えんとあ
味方既ハ総敗軍とあり日

の影ま西小傾きけとハクラールトの地の大将ヨコンと
云ふ者強て是と諫め残兵と引纏めて戦場をり小引
退とて 鷲黒太子ハ初め仙兵の勢ハ猛小ハ味方殆
んど破んとるハ自身真先小進と死と願りす
指揮せ故諸軍と小働まさ終小の大勝利と得
るハ全く太子の功績なり英國と仏蘭西と三十七年間
の闘争小及びハ此一戦と以て初めとするあり
太子義都華と鷲黒と名けハ太子戦場小赴く毎
小黒き装束と用ひと故小鷲黒と以て其称とあり
と云ふ

爰い小こままく英吉利いんぎりと西班牙しぱんやと久いく和睦わくぼくしと事ことなりしと
西班牙王しぱんやおうヘートルへーとるセクリウルせくりうると云いふ者もの

「クリウルクリウルハ渾名あやな小こしし猛惡もうあくと云いふ爰ある王固わうこより性質せうしやう
凶惡きゆうあくありふ因いんり他人たにんより志しる名なけりの我朝わがしやう源太義げんたいぎ
平七兵衛景清へいしちべゑけいせいととる惡あくとと以もつて渾名あやなするハ伯父おぢと討うつ

ととる故ゆゑふはて是こゝらと同一どうい類るいひひるん
けけらら盟約めいやくと破やぶり英吉利いんぎりの高船たかふねと襲おそひて積つむととるの荷物にもの
と悉しつく奪うばひ乗組のりぐみの人数にんずと討殺うちころしけらら英王大いんぎりいい怒いかり

屢しばしばその罪つみと攻せける小西班牙王しぱんやおうハ有無うむの返答へんたうふも及およびす
軍艦くわんかん數艘すうざうと浮うへ英國いんぐうと討うんと押寄おしよせ来きるし聞きへる

小こより暫時しばらく仏国ふつこくとの戦争せんそうと捨すちあある英吉利王いんぎりおうの軍艦くわんかんと
整ととのへ約やく黒太子くろたいしと共ともふ出帆しゅつぱんしし海中なかつふお於おく雌雄しゆうじゆうと決けせん
と西班牙しぱんやの軍ぐん小向こむかひへりけけ時とき彼の兵へい既すでに我われが海岸かいがん近ちかく
ままぐ来きりけけらら太子たいし舳しゆう小立こたてく西班牙しぱんやの船隊せんたいと望のぞむ小
船ふね大おほき中ちゆうふ擡たと組揚くみあげ諸將しよしやうの旌旗せいしの色々いろいろと海吹風うみやま
小飄ひらぶせしし勢いきほひ甚まど盛さかんふて當あたり難がたくぞんんととる
けけの再説さいせつ英吉利いんぎり西班牙しぱんやの兩船りゆうせん次第しだい小漕そうよせて互たがひひふ
巖いわく打鳴うちなす陣鼓じんこの音ねき濤たう々と灘なみふ擡たる荒浪あらいなみの
音ね小應おとじて夥おほくをや矢合やあせの戦争せんそう始はまり英王いんぎり自
身みづか船頭せんとう不在ありて指揮しめりとも巖いわ重かさなりけけ時とき鯨魚くじやう

太子の二三三小船を進め敵の大船小繋ぎ止めたり
西班牙勢こもて入んて築立置くる櫓の上より木石を
投下し矢を射出す雨の如し太子元より味方と死地
小落陥と一時小雄雄と決せんと思へば少しも痿きず自身
劔戟を揮つて船縁小立働き敵船へ乗り込んとすこと西
班牙の軍勢もまろく能防禦するを以て左右るくい事と
果さず必死と挑み争そりうち敵より投げ下す大石小
船縁を損じけん海水送り入りて太子の乗る船今や
沈まんすすけい時遙く彼方ふて敵の船と戦ひて挑み居
るランカストル侯の太子の船より頻り水と掻出す

と見て事の急ると察し當の敵と捨船と飛り来り
西班牙船の傍より襲ひ掛るに西班牙勢之を防がん
新手の方へ兵を分け少く軍の度と失ひ隊伍自づ
と散然とる太子爰ぞと身と跳らし我小続けと言
さす小西班牙船へ乗移るに血気の若者我劣らどと太
子小続けり飛込に飛込に必死の働き猛むとど西班牙
の軍勢もまろく是憤激突戦し未だ勝敗決し得ず
時小彼方の船縁よりランカストル侯も攻上り左右よ
り撃ちかまひ西班牙勢今いかり半ハ弓を投出し
鉾を投つて降参し半ハ太子が乗捨し船へ飛入り

飛入りて遁んとある時彼の船の重み付ゆ忽地沈み
 て見へずるり往たり斯の如くありけむ西班牙勢終不
 敗一彼の王ポートルゼクリウルも本國さうく退帆るり
 け日の戦ひ小英吉利方へ分取せし船廿四艘乗り沈めし
 船数と知らず斯の大勝を得たりも英王の武畧と太
 子の働き援群るるが故ありとして三軍さすく尊敬を
 たり斯く後西班牙の容子と探る小再び兵と向べきるの
 威力るけむ其終小是と捨かき千三百五十六年今より
 五百十七年前再度大軍を起し小崇西と攻んとる
 け度の兵とニツ小分け一手の英王自身將たりて白耳義



英王 出陣の

國の方加雷城へ兵と向け東
 北より攻登り一手の勅黒黒太
 子將たりて西班牙國の方波
 耳多城へ兵と向け西北より
 攻登り両面より一時小
 夾撃し小崇西の王都と
 襲ひ取らんとるり然
 るに勅黒黒太子の豫て我
 有とるり置るる波耳多城
 小着りて後直ち小内地小

討入り往々数城と拔仏蘭西の首都巴黎斯の方へ進
 撃すけい時仏蘭西王の非立小繼ぎて約翰とらふ人位
 小即居りりしが英軍波耳多城より侵入来ると聞
 急ぎ軍馬と整へて大兵巴黎斯の首都と奔り波耳多
 城へ進みり英吉利方より兵誤り仏蘭西王雲霞
 の如き兵と引く後方の路より追来ると告げる故鰐黒
 太子の仏王の兵極めて大軍あるべけしが暫時彼が鉄気と
 避け其動静と計らんとて是も前路へ兵と早め既ふ
 て仏兵前路より進み来り早間近なりとの注進を
 太子の爰小誤ると知るとりども最早避へざるは

まが戦ふ、囚虜不付りのニツふて進退既小究りり七
 子先づ斥候の兵と出り仏軍の容子を探らする小味
 方より一倍の勢あるより告来ると総軍顔を見合せ
 愕然と有様有り鰐黒太子は更小恐とす次第を
 定めて陣營と設け必勝の策小あらんと老練武功の
 臣と共小頻り小思量と廻りり仏蘭西王約翰も英
 軍近き小在りと聞き波亞疊府の廓外小兵と駐めて
 陣を布き両軍既小鼻を突合せり如くある故暫時が
 不が有豫ととも何となく物忽と試ふ打陣鼓
 の音きも胸小答ゆるとるも遂小両軍押出し波亞

置府の郭外る廣野ふひと誥寄せり勅黒太子
此時小味方の諸將を顧りて大音声小英國へ我為小
贖と出さずとを示し

歐羅巴弱ふと囚虜とありて金と出しく贖へば其
人と取戻せるあり然ると英吉利あり我囚虜と成
りても賤ひ金へ出さずとの事あり太子若し此合戦
小利無きとて討死すべし云ふと以て衆軍小知らせ
必死と覚悟させしるあり

兩軍中小打鳴す陣鼓濤々として弥進く旌旗
間近小飄へる下小早箭合せの軍始まりし見へる

必死の英軍忽地小仏蘭西勢の先鋒へ喚き叫んで突入
りて小仏蘭西勢へ元より大軍英の人数を推しり巻微塵
小成んと競ひかり追つ返しつ戦ひしが死地小入りり
英軍の鋒先するどく突立ちると仏の先陣次第小退ぞ
き旗色るどく後陣の仏軍援ひ来る
と右翼小備へ一英の一將之と迎へて遮ぎり止め一歩も
前へ進ませずけ時きくも左翼小英仏兵と接へあひ
一大激戦始まりて早乱軍の模様とありり然と仏王
僅の間小度々替り人心未と一和せず餘多戦野小出
しものも少るさ小有らぬと以て猜もすは英軍小追

くとらと見えける故に王頻り小気と奇ち下知と傳
 えし旗本と操出さんず勢ひあり爰に小蘭西方の一將疇
 爾良侯其勢六千餘りと率ひ英仏兩軍の間小あり
 小山の上小陣と配り先程より戦争を諡りあつて見物
 る一居る故に黒黒太子は一軍小心を置備へ固めて動ろ
 ざりしが前軍の旗の手追々進むと見て然らば山上の
 敵軍へ一ト當あつて試んと僅の兵を分て山上へ馳せ
 向せしる小疇爾良侯の隊列はさうく動いて見えけるが
 然もそ有らぬと黒黒太子馬の頭と振向けるとぞ大
 事の一戦と目とさてもせざり白眼居るうち豈計らんや山

上の一軍へ叫と云ふ声と諸とも大將始め逸足出り逃出
 たり爰に小蘭西方の黒黒太子と戦争小勝るとぞ自餘の敵
 小眼とかけず小蘭西王の本陣へ襲ひかつて討破ると自
 ら真先小馬と進ませ総かり小成り突かる小王約翰
 も兵と進め互ひ小暫時血戦するうち小蘭西勢は次第
 次第小何方ともあつて落亡せ僅り小王の旗本勢の踏
 止りて一歩も去らね却り小勢の英軍小あつたり巻と
 小王約翰も爰に始め驚き圍と突て一方を討破
 らんと勇と振へど味方の兵士すて小疲と降参するあ
 り討りあり残り少る小ありける小ぞ今其道と難き

と知り旗を伏せ兜を脱ぎ遂に仏王約翰始め附従がひ
 一將卒諸とも勅黒太子の軍門に降せ乞てぞ出小
 ける是と波亜豊の一戦とて後人今も云ひ傳え太子の
 美談と為す所のあり実ふ所の太子の勇あり智あり
 まるに仁あるの名將也是侍勇と為しる仏王を尊敬する
 と親切ふん万事已と謙遜さるる誇るる体みけしむ
 仏王もまゝ感服して深く恩茂を謝せしと云ふ
 加雷城に向ひける英王の國主父子の留守と窺ひ蘓
 格蘭人叛き由聞えけしむ直に途中より陣と廻
 ら蘓格蘭の地へ馳向ひし英王の旌旗速る小

飄へり来るを見蘓格蘭人忽地降伏るしとけり
 故再び船と加雷城に向けしむ太子が波亜豊の戦
 争より時日遙る後とあり
 波亜豊の戦争の後太子兵と動らざる波耳多城小在
 りて國人と懐けんと偏る寛仁の政事と施し三年と爰
 小費す間やうや新地の人民も化し服しるる体るゆえ
 波耳多城の旗下の大將小任せおきしむる本國へ歸陣る
 さんと千三百六十年今より五百十三年前勅黒太子
 の仏王約翰と將く英吉利國小凱陣せし実ふ古郷
 の錦ふて威嚴自つと堂々たり英王太子の軍功と稱し



西班牙國
石と砲
英軍と

けむび責取りたる 仏蘭西の
 地を以て太子の所領と為し
 けむび太子の再度波耳多城
 小渡りりあり政事ふらちと
 委ね且仏兵と責討の備へ
 とのこそ設けりる
 太子の妻ハ「ダント」侯の女
 小い國色ならびる一世
 稱して「ダント」の美女と云ひ
 たりとぞ

爰小西班牙國の中カストル府の王子「ドン」ペトロとる人あり臣
 下の小國と逐て波耳多府小来り竊居たり一が黠
 太子の智力衆小勝とるるとん太子の扶助小依り旧位
 小復せんと願ひけむと太子「ペトロ」ガ人となりとんる
 小勇氣在りて且志ざり温和と好むの容子あるゆゑ
 是と憐むといふも軍と起りて速く小舊都小返らせん
 と約しけむと「ペトロ」深く悦び僕若し舊位小返ると
 と得ば其兵士小後小至り厚く報ふべしとて数多
 の條約と記し太子が膝下小呈しとる爰小於い黠黒
 太子義都華ハ三万の兵と起り千三百七十年今より五

百三年前西班牙の「カストル」府さうて進発すは時カス
 トル府ふい「ドン・ヘンリー」とらふ者兄の「ドン・ペドロ」と逐出
 く其国ふ王「フー」グ兄の「トロ」ロ「ロ」ロ西ふ至り英の太
 子「義都」華と頼之兵士数万と起し波耳多府より
 侵撃し来ると聞き「ヘンリー」も六万の兵と起し「ナヤ
 ラ」とらふ所の「廣野」も討て出でたり然と「鰐黒」太子
 も爰ふ進み来り同「ナヤ」ラの「廣野」陣し「西軍」もふ
 切迫るし時ふ夷く陣太鼓の音と共ふ「西班牙」の
 先鋒と見え二千餘りの騎兵隊勢ひ猛ふ飛出多
 英の一將同く二千の兵と布く是と半途ふ出迎し一

茂るる木立と指し馬ふまて人ふまれ矢の往まふ射立け
 り協りと思ひけん未と戈とも接へるふ列を乱し
 引あうぞけり二陣代て伐て出で木立の中の英兵へ突
 からんとぬける所を英吉利方の第二陣急ふ進
 んて是と迎へ双方必死と撃合し「ヘンリー」が「西班牙」方又
 敗し右往左往ふ追立ちと「ドン・ヘンリー」の本陣へ頼
 まかりて混乱す「鰐黒」太子遙る後陣ふ見物を
 せしが早戦争ふい勝るるぞは「図」と振さず進め
 と鞭振かぎ指揮るし「自」ら「真」先ふ進む
 総軍るふら猶豫るるべき我劣らと「ヘンリー」が

百三十五 西哲叢書 卷之三

本陣目かけ押かる時ふハシリ一撃高く相図と
 見えて呼ぶを西^{いすぱんや}班牙の陣中よりスリ^{スリ}ンゲルの機関
 と以て石と飛すと雨の如し
 スリ^{スリ}ンゲルの機関と以て石と飛せる軍器の名あり
 然も此の飛石の如く前へ進み英の軍卒打倒さ
 るもの夥しく面を向くべき振るけまは稍敗せん
 とぬける故太子の急な指揮をかへスリ^{スリ}ンゲルの隊
 と目かけ弓隊としく射させけまは石の重く機関と
 以て弾けど箭よりも遠長へ達せざるを暫時小
 しく射止らまると少し撓みて見えけるところを

ト^トロのト^トロの一隊の兵と引具ハシリが本陣へ三三を
 三三撃て入るるきやひ獅子の荒まると如く縦^{たて}に
 馳めぐる英軍とまふ気とらち続いて撃入る勢
 ひ小^{いすぱんや}西班牙勢まう立ちま総陣つひ小列を乱し我
 さきふと敗走すト^トロの逃ると劇しく逐かけ既ふ
 て本^{ほん}営へ立戻り太子のま出ると時^{とき}の疲まて息も
 絶入るがうり昏然とけり有様あり翼日ふ至り
 る合戦ふ生捕る者と太子より請取り尽く殺
 戮を加えんと望まけるゆゑ太子の初めてト^トロ
 残忍ると知り心ふあどろき囚虜と為せしもの

西遊記 卷之三

十三

命ハ吾への贈り物として赦さるべしと乞けしハトロモ
 餘多る太子の供ふるあり斯て後トロハ太
 子の援けふより再度ハカストル王の舊位ハ復せしふより
 太子ハ波耳多小帰陣をさんとして兼く約條の通り
 軍卒らへ報ひの賞金あらんとて夫とるく論ハ促し
 一日と遅滞するより疫邪の病ハ流行る
 来り太子の陣中多くこまふ犯さると太子もま
 疾と染りしこと日ならず本復るすこと得ら然
 且ど是より元の如く健康あるふに至らざりし時
 ハトロハ約條の賞金と出さるのこみならず却つて悪



○英軍
 ハモシ府
 と焼

計と施さんとする容子ある
 小弥ハトロハ倭悪あると知
 り欺くことと悔ると之
 とも猶寛大仁恕の計ハ
 と以て能やどふことと會談
 波耳多府ふそ凱陣る
 ける太子病後より精気衰
 りくるふや神思急ふる
 り常の容子少く衰り
 くることハ仏蘭西國の新

白江口と夏

口三浦

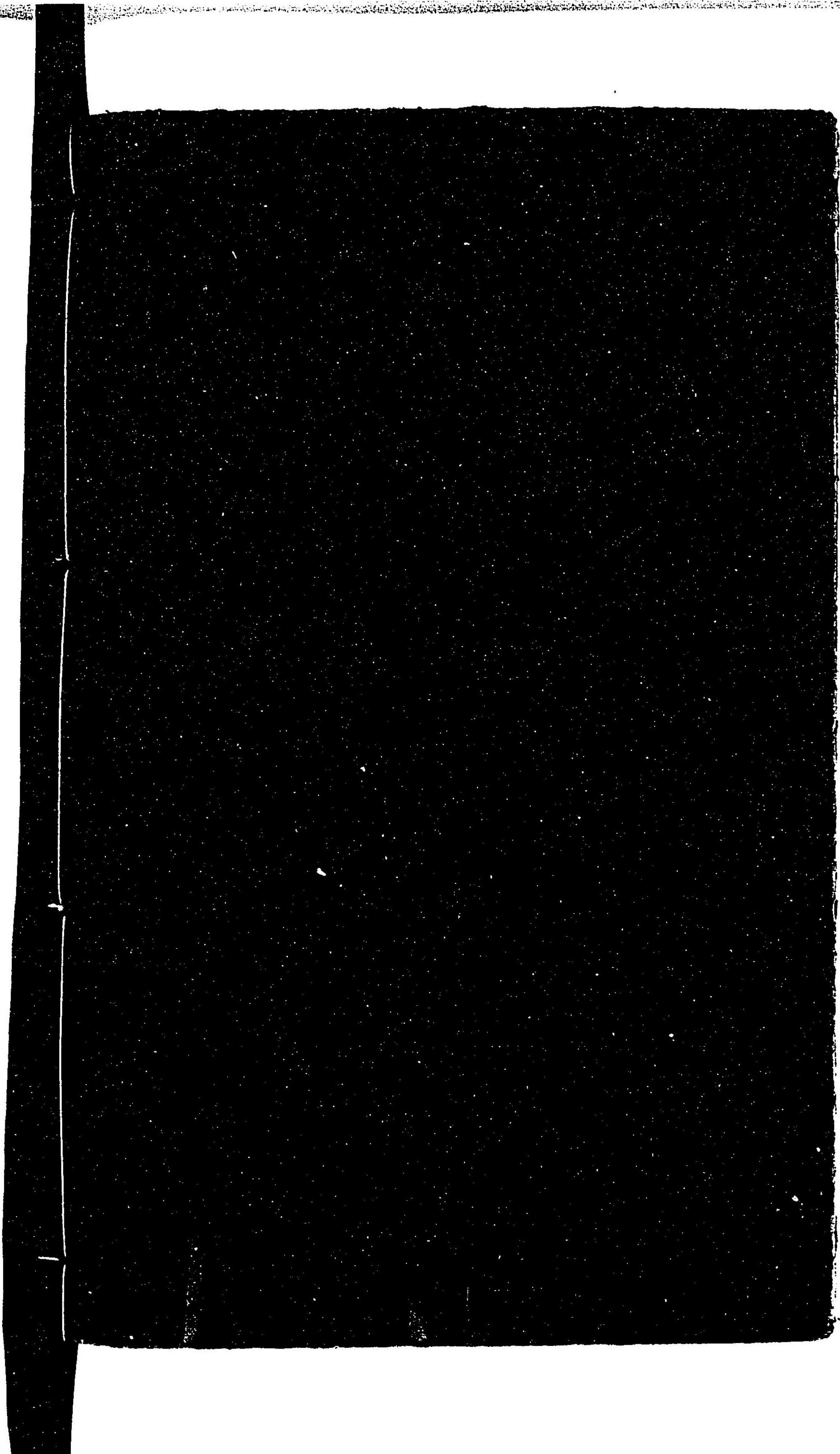
二七

領内のうちある里摩日府の人民謀叛を企むの聞えあり
 けとて我彼ホ深く恩沢をうるを置お彼等返く我
 不反くは何の故ぞよく必らず思ひ知らすべしとて
 遂に数千の軍を起し里摩日府を襲ひて英兵市街に
 突りつけしる市街の人民老ひるとを扶け幼稚を抱さく
 道路に伏し慈悲を願ふんと為しるを兵卒是れ
 乱をかり屠り殺すと残忍なりけし時太子の病後の疲
 き又奔し馬に乗ると能く里摩日府の人民を我
 兵士らに撃殺すと眼前に見物あり宜しく愉快と極
 めんりのと車に駕し府中に入り老若男女の哭叫ぶ

声と楽しと聞たりい実不猛悪の呼ぶふしく約黒
 太子が生涯の一失ると皆云へりその後太子の病疴
 日々重り醫薬も著しを至とて一ま本國へ歸
 らんとて英吉利の首都倫敦に戻りて病疴を
 うむるからず然とて五年の間は命を保ちしが
 千三百七十六年今より四百九十七年前の六月八日
 四十六歳と一期とて遂に黄泉の鬼とありとて
 何人うとて惜まざらんや太子終りふ望んで黒摩
 日府の人民を屠りて明玉の一疵ありとてくども
 西班牙と海中に伐ち仏蘭西王と囚虜ふりて其地と

多く我が有とするるも功業あげて筆難く英國の
美名と四海ふ耀せし英國前後ふけ太子を以て
一とするるは是ふ因りて一書のみと此処ふ出す

西哲叢談卷之二終



特32
994

大日本教育會館

三	八	三	東
冊	七	架	利
冊	號	架	書
冊	號	架	冊

冊